

「グローバルな中世」から「中世のゾミア」へ オックスフォードの中世グローバルヒストリー

小澤 実

筆者は、二〇一八年三月から二〇一九年三月にかけて、オックスフォード大学グローバルヒストリー研究所(Oxford Centre for Global History、以下OCGH)に客員研究員として滞在した。そこで筆者は、同研究所で中世グローバルヒストリーを牽引していたキャサリン・ホームズ博士らとともに共同研究を進めるとともに、帰国直前の二月八・九日の二日にわたって「中世のゾミア…グローバルな中世における国家なき空間」(Medieval Zomias: Stateless Spaces in the Global Middle Ages)と題したワークショップを開催した。本稿では、現在進行中のプロジェクトも含めて、オックスフォードで進行中の中世グローバルヒストリーの研究状況を報告する。

史苑(第八〇巻第一号)

一 オックスフォード大学グローバルヒストリー研究所

オックスフォード大学の歴史学部内にOCGHが創設されたのは二〇一一年六月である。所長は初代ジョン・ダーウィン(二〇一一年―二二)、二代ジェームズ・ベリック(二〇一二年―一六)、三代エリカ・チャーターズ(二〇一六―一八)、四代がキャサリン・シエンクとパトリシア・クラヴァン(二〇一八―一九)、現在は再びエリカ・チャーターズとアンドリュー・トムソンの両名である。¹⁾

言うまでもなくオックスフォード大学は、イギリス帝国史研究の牙城でもある。大学としても歴史学部としてもイギリスで最も古い歴史を持ち、出版局では『オックス

「グローバルな中世」から「中世のゾミア」へ（小澤）

フオード英語辞典』(Oxford English Dictionary)と『オックスフォード人名辞典』(Oxford Dictionary of National Biography)という歴史学にも不可欠のレファランスを刊行し、現首相ボリス・ジョンソンをはじめとする数多くの政治家を輩出するオックスフォード大学は、一九世紀以来のイギリス帝国主義の知的人的バックボーンとして機能し続けている。そのような大学であるからこそ、支配の学としての側面もあつたイギリス帝国史研究もまた盛んであつたと言えるのかもしれない。

エリザベス朝以来海外展開を続けてきたイギリスは、二〇世紀初頭には世界全体に植民地を有する最大版図を實現した。海外に人、モノ、カネ、情報のネットワークを張り巡らせることに成功したイギリス帝国は、それ自身がグローバルな世界展開の事例として重要な研究対象となつた。このようなイギリス帝国史の研究は、イギリスの歴史研究において特異な位置を占めている。当該分野におけるトピック嗜好はいわゆるグローバルヒストリーと一線を画すという認識を持つとする理解もある一方で、取り扱われるテーマそれ自体はまさにグローバルヒストリーが強調する内容でもあり、帝国史がイギリスにおけるグローバルヒストリーの代名詞として拡大機能するようになったことは自然な流れであるとも言える。オックスフォード大学

には、まさに帝国主義的拡大の一途にあつた一九〇五年に、植民地史・コモンウェルス史を担当するベイト教授職講座が設置されており、帝国主義研究の屋台骨の一つとして現在に至っている。OCGHの初代所長のジョン・ダーウインはナフィールド・カレッヅに設定されているベイト講師職を、二代所長のジェームズ・ベリックはベイリオル・カレッヅと紐づけられた同教授職を歴任しており、後者が採用されることになる二〇一〇年に公示された当該職の公募要件には、「この教授職は、イギリスの海外関与の歴史と結び付けられていれば、イギリス・コモンウェルス史もしくは帝国史、ないしはグローバルヒストリーのどのような分野であれ、活動している研究者に開かれている」(The Beit Professorship is open to scholars working in any field of British Commonwealth or imperial history, or of global history if it is connected with the history of British involvement abroad)と記されている。そのような意味にあつては、少なくともOCGHは、設立の要件としてイギリス帝国史研究の成果が最も効果的に反映される場でもあつたように思われる。

しかしながら周知のように、いわゆるグローバルヒストリーは、ウオーラーステインによる近代世界システム論をその背景としている。そのため、一六世紀以降の「世界の

一体化」によるヨーロッパの急速な「発展」を前提としたパスペクティブを内包していたことは、繰り返し指摘されるところでもある。この数十年、オックスフォード大学に限らずアメリカにせよフランスにせよドイツにせよ、グローバルヒストリーを標榜する研究者は、原則として近世以降の専門家に限定されていたように思われる。それが世界史（ワールドヒストリー）、トランスナショナルヒストリー、交差する歴史（*histoire croisée*）などと名前を変えたとしても、「世界の一体化」が起点となる状況はさほど変わっていない³。かつて社会史がそうであったようにグローバルヒストリーも歴史学の一分野として様々なメディアに登場することになるが、「グローバルヒストリー」の看板の下に中世史家や古代史家が連なることはほぼなかった、と言ってよいかもしれない（ただし日本を含めた各国に、前近代の「グローバルヒストリー」に相当する認識がなかったわけではないことは次号の論考を参照）。

他方でOCGHは、その設立当初から古代から近現代にいたる通時性を特徴としていた。古代史家のニコラス・パーセルや中世史家のクリス・ウィツカムも創立メンバーに名を連ねており、帝国史研究を母体としながらも、その前後にとどまらない広がりやOCGHは持たせようと試みていたように思われる。創設メンバーらが編集をになった『グ

ローバルヒストリーの展望』では、関係する研究者を招聘して、オックスフォード流のグローバルヒストリーへの接近方法が開陳された³。三部で構成される内容は、第一部を歴史社会学と経済学という他分野との接合を、第二部では前近代史のアプローチ方法を、第三部ではイスラームやアメリカというイギリス帝国史を相対化する視点を論じている。

II 「グローバルな中世」(The Global Middle Ages)

OCGHのこうしたグローバルヒストリー研究の展開を背景に、中世と呼ばれる時代にもグローバルヒストリーの考えをより具体的に持ち込もうとしたのがオックスフォード大学のキャサリン・ホームズ博士とバーミンガム大学のナオミ・スタンデン博士が牽引する研究グループである。ビザンツ帝国の対外関係を専門とするホームズ博士と中世中国の遊牧民族政権を専門とするスタンデン博士は、そもそも専門がグローバルな視点を要求される地域と時代であり、グローバルヒストリーが学界と勤務先を席卷するにつれて、中世に対してもグローバルな視点を意識するのは自然な流れであったようにも思われる。両名は二〇一二年から一四年にかけて英国芸術人文研究会議 (Arts and Humanities Research Council) その他より「グローバル

「グローバルな中世」から「中世のゾミア」へ（小澤）

な中世を定義する」(Defining the Global Middle Ages) というプロジェクト資金の援助を受け、オックスフォード大学、バーミンガム大学、ニューカースル大学を拠点として数多くの研究者とともに「グローバルな中世」を模索した⁵⁾。彼女らは、中世世界のネットワークシステムを提示したジャネット・アブー・イルゴドと地域間比較と同一時代における類似性を指摘したヴィクター・リーバーマンの成果を前提としながら、次のような目的を設定した。

1 中世史を真にグローバルな基盤の上に着地させておくこと。アフリカと南北アメリカを統合することにより、「グローバルな中世」という新しいワールドは、他の時代から借用してきたまづもってユーロセントリックな議論によって形作られたユーラシア史というもう一つの形とはただならないように保障しようと試みる。

2 「グローバル」が、中世それ自体で経験されたように、記述資料だけでなく物質資料、それも、エリート層の国際交易への協調とは対照的な、非エリートのコネクストにおいて生み出された物質資料にしっかりとした注意を払うことで分析すること。

3 喫緊に必要とされているクロノロジカルかつ地理的な特性を、生成しつつあるグローバルヒストリーの分野へ

と付け加えること。

4 グローバルであった中世の諸基礎を研究かつ教授するための実務的かつ知的なツールを身につけ、拡大しつつあるグローバルヒストリーの領域に貢献することが可能な、英国そしてそこを超えた生命力ある歴史家共同体を創生すること⁶⁾。

「グローバルな中世」プロジェクトの梗概と特徴は併載しているホームズ論文に詳細に譲るが、要点をかいまみんで述べておきたい。「グローバルな中世」は、近代以降のグローバルヒストリーをただ中世に遡らせたものでもヨーロッパの拡大を正当化するものでもない。当該プロジェクトのタイトルが、「グローバルな中世」を所与の前提として取り扱う「する」(doing) ではなく、「定義する」(defining) という動詞を選んだように、そもそも「中世」と呼ばれる時代においてグローバルヒストリーを論じるためには何をなすべきかという根本的な問題に立ち戻る。つまり「中世」という時代区分も、グローバルヒストリーの暗黙の前提とされている「ヨーロッパ」も、文献研究という史料枠組みへのアプローチ手法も一旦かっこの括弧、(一応)フラットな場から「グローバルな中世」の構築を図ろうとする。その検討の焦点は、ワークショップで検討した

「ヒストリオグラフィ」(Historiography)、「時代区分」(Periodization)、「ネットワーク」(Networks)、「文化を記録する」(Recording Cultures)であった。「ヒストリオグラフィ」は近代を中心とするグローバルヒストリーで重視されているアブローチの問題点の剔抉、「時代区分」は西洋中世史で暗黙の了解とされている五世紀から一五世紀というフレームの妥当性、「ネットワーク」はグローバルヒストリーのキータムとして無造作に用いられるネットワーク概念の再検討、「文化を記録する」では歴史学の基本史料である記述文献の価値の相対化を図っているように見える。加えて重要と思われるのはその空間設定である。別稿で述べるように、中世グローバルヒストリーを標榜したのは本プロジェクトのみではない。しかしその大多数がユーラシアの中のヨーロッパを対象としていた。しかし「グローバルな中世」では、地中海の彼方のアフリカ、そして大西洋を隔てたアメリカをも検討の対象としている点に、類似的試みからの新規性を感じることもできる。

その成果として二〇一八年一月に刊行されたのが『グローバルな中世』である。かなりの分量を持つ方法論を論じた導入部と初期近代との接続を論じる結論部を含めて一章からなる本論集は、「グローバルな中世を定義する」で検討された諸問題に対する現時点での回答が収められて

いる。以下、目次を記しておきたい。

- 1 導入…グローバルな中世に向けて(キャサリン・ホームズ、ナオミ・スタンデン)
- 2 知の源泉…諸文化を記録する(マーク・ワイトウ)
- 3 コスモロジーをグローバル化する(キャロライン・ドゥズ・ペノック、アマンダ・パワー)
- 4 ネットワーク(ジョナサン・シェパード)
- 5 グローバルな中世における構造化された移動性(ナオミ・スタンデン、モニカ・ホワイト)
- 6 遠距離諸関係における信用(二〇〇〇—一六〇〇年)イアン・フォレスト、アン・ハワー)
- 7 グローバルな中世の経済的想像力(サイモン・ヤロー)
- 8 定住、景観、ナラティヴ…歴史で何が実際に起こったのか(コンラート・ライザー、ナオミ・スタンデン、ステファニー・ワイン||ジョーンズ)
- 9 政治、一〇〇〇—一五〇〇年…仲裁とコミュニケーション(ヒルデ・デ・ヴェルト、キャサリン・ホームズ、ジョン・ワッツ)
- 10 世界システム・パラダイムを再稼働する(グレン・ダブリッジ)
- 11 グローバルな初期近代とそれ以前に何が生じていたか

「グローバルな中世」から「中世のゾミア」へ（小澤）

という問題（アラン・ストラサーン）

本論集の特徴を指摘しておきたい。まず本論集は、「グローバルな中世」の見取り図ではない。そうしたさしあたる見取り図は、例えば『ケンブリッジ版世界史』の該当巻やクリス・ウィツカムの単著に任せるとして、本論集の目指すところは、「グローバルな中世」を論じる際の方法論の模索とそのケーススタディである。そして、極めて特徴的なことに、多くの章は、異なる地域の専門家によって共同執筆されている。例えば九章は、中国史家、ビザンツ史家、西洋史家の共同作業による。いずれもイギリスの、多くはオックスフォードの歴史学部で教育を受けており、たとえ異なる地域を専攻していても、そしてたとえ異なる方法論によって立つとしても、相対的に対話可能なヒストリオグラフィの中で教育を受け研究を進めてきたメンバーであるからその成果でもあろうか。さらに言えば、いずれの章も、これが決定的な方法論であり最終結論であるというわけではなく、更に議論が開かれている点である。そういった意味では過渡期の間報告であるが、他方でここでの議論をもとに、新しいあり方の「グローバルな中世」を生み出す素材にもなりうる。本書が紙媒体ではなくウェブのダウンロードという形式で全体を配布しているのは、

（英語の普遍性とオックスフォード大学出版局の権威を背景として）世界中の読者との対話を促そうとしているようにも見える。

オックスフォード大学歴史学部という世界最大の歴史学組織を背景とした試みだけに、私たちは本書に大きな期待を抱くかもしれないし、また、直接編者や執筆者を知る筆者としては、彼女らの対話を試みる研究者が一人でも多く出てきて欲しいと思う。他方で一点、大きな問題点を指摘しておきたい。編者らも自覚しているように、このプロジェクトに際しては、中東、中央アジア、東南アジア、朝鮮、日本、太平洋などは専門家が得られなかったことである。同じ史学科内にこうした地域の専門家たちを当たり前のように抱える日本の歴史学研究から見れば奇妙なことではあるが、欧米の場合、アジアの多くの地域の歴史研究については、歴史学ではなく東洋学の枠組みで今だに大学内に配置されている^⑤。こうした制度上の壁は、我々が考えている以上に大きいようであり、結局、他学部やロンドン大学東洋アフリカ研究所（SOAS）にコンタクトすれば得られたであろう当該地域の専門家は当該プロジェクトに参加し得てないし、当該プロジェクトを機に史学部内に設けられた講義「グローバルな中世」でも他学部からの応援は得

られていない。

私の滞在中に、オックスフォード大学初の「中世ユーラシア史」というポジションが公示されたが、採用されたのは初期イスラーム史の研究者であった（誤解なきよう申し上げておくが、採用された研究者は素晴らしい業績を持つイスラミストである）。私たちとしては、ユーラシア史と云う以上、中央アジアを想定しがちだし、公募要件も「三〇〇から一三〇〇年の中世ユーラシア史。一つもしくは二つ以上以下の地域を専門とするもの…中国を含む東アジア、中央アジアとステップ地帯、インド、イスラム世界。ただし西ヨーロッパとビザンツは除く」であった。しかし、結果から見て、現在のオックスフォード大学の中世史にとって喫緊の「中世ユーラシア史」スタッフは、イスラーム史であったということである（もちろんこれは学部教育と紐づけられているので、学部教育の観点でも必要と判断されるスタッフであるという制約もある）。私たち日本人研究者でグローバルな問題に関心を持つ向きは、日本史・東洋史・西洋史という制度的枠組みを嘆くことが多いが、オックスフォードに限らず欧米における歴史学は、歴史学ヨーロッパ史の延長線上の歴史という、更に大きな制度的枠組みの問題を抱えていることは認識しておいて良いかもれない。

三 「中世Zomia」 (Medieval Zomias)

冒頭で述べたように筆者は、二〇一八年度の一年間、ホームズ博士を受け入れ教員としてOCGHに滞在した。筆者は、二〇一六年度に採択された科研費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）遂行の一環として、当該施設との共同研究を義務付けられていた。他方でオックスフォード側でも「グローバルな中世を定義する」プロジェクトはすでに終了しており、次の段階に進む必要があった。五月にホームズ博士とユニバーシティ・カレッジの中庭で相談した時、いくつかの可能性を示された上で、「中世のZomia」はどうかという提案を受けた。プロジェクト関係者が、近世から近代の東南アジアをフィールドとしたジエームズ・スコットの著書『支配されない技術』が提起した「Zomia」という地理的分析概念に強い関心を示しており、オックスフォード側でワークショップが検討されているという。中心にいたのは、『グローバルな中世』の寄稿者でもあり、「グローバルな中世を定義する」を実質的に継承する若手のイアン・フォレスト博士とアマンダ・パワー博士である。筆者はそのスコットの主著も読んだことはなかったが、ホームズ博士の説明を聞くにつけ、中世グローバルヒストリーの一つの可能性としてありうると判断するに至った。その

「グローバルな中世」から「中世のゾミア」へ（小澤）

後日本から翻訳を取り寄せて通読するに、網野善彦らが提起したいくつかの論点を強く思い起こしながらも、ゾミア概念を中世に敷衍するそのやり方に可能性を感じた。

その後、資金繰りも含めて、ホームズ博士、スタンデン博士、フォレスト博士、パワー博士そして私の五人が、ユニバーシティ・カレッジのホームズ博士やオリエル・カレッジのフォレスト博士の研究室に集まり、毎回一時間強の議論を繰り返した。メールのやり取りも数十通では聞かないだろう。私自身、日本では何度もそれなりに大きなワークショップやシンポジウムを企画したことはあるが、複数日にわたるワークショップを世界中の中世研究をリードする研究者らとその母語である英語で計画するというのは初めてであった。そしてもちろん自分の緊張を強いられたし、ナチュラルスピードで専門的な議論を進める彼女らのいうことを全て理解できたわけではない。いずれにせよ、日程が決まったのち、最終的にフォレスト博士が議論の結果をまとめてプロポーザルを認めた。以下に、その主張文を再録しておきたい。

二〇〇九年、ジェームズ・スコットは、東南アジアのトランスナショナルな高地を記述するために「ゾミア」という用語を用いた。そこでは社会、文化、政治が——二〇世

紀半ばに至るまで——カンボジア、ラオス、ベトナム、ビルマ、そして中国の中核となる低地領域とは全く異なる条件が広がっていた。スコットの論じるところに従えば、低地は容易に成長しつつある国家構造へと組み込まれたのに対し、ゾミアの民は容易に統合されることを拒んだ。彼らの農業は一時的なやり方で空間を利用し、彼らは読み書きができず、そして独自の言語と文化を備えていた。統治政体は彼らのもとに到達し、彼らを数え上げ、彼らの生産を測定し、彼らに課税し、彼らを教育／改革し、彼らに諸制度を担わせ、彼らを征服することが困難であると理解した。加えて、歴史学、人類学、開発諸学という伝統的学問枠と劇的かつ意識的に断裂することで、スコットは、ゾミアを統治されざることとは、「プリミティブな」「自然的な」社会の遺物ではなく、国家の成長それ自体による歴史的産物であるとの主張もした。

スコットの作品は我々に世界中の権力、空間、社会、そして文化を比較という視野で考えるための新しいモデルを提供する。我々の目的は、中間的空間、つまり——中世において——居住可能な地球の表面の大部分を包摂していたかもしれない空間ではなく、国家や「文明」の周辺に基盤を置く、今流通しているグローバルヒストリーのモデルに異議を唱えることである。ゾミアについて考えることに

よって私たちは、世界史の単位や規模についての前提を問
い直し、「読み書きができない」、「統治されていない」、「後
進的な」といったような何か欠けているとか何らかの点
が欠如していたと通常であれば考えられがちな社会につい
て積極的な記述方法を見つけるように促されるのだ。

会議は二〇一九年二月八・九日に、ブリテン全体を視野
に収めた中世史で画期的な成果を収め、オール・ソウルズ・
カレッジのチチュエリ講座教授を務めたリース・デイヴィス
の名を冠した歴史学部の会議室で開催されることになっ
た。以上のアジエンダに沿ったチュエア、報告者、デイスカッ
サント合わせておおよそ四〇名ほどが招待されることにな
った。日本側の報告メンバーはヴァイキング史の筆者の
他に、ブリテン史の鶴島博和（熊本大学）、イタリア史の
佐藤公美（甲南大学）、日本史の川戸貴史（千葉経済大学）、
中央アジア史の諫早庸一（日本学術振興会「当時」）である。
メンバーの選別条件は、英語で報告できることは前提とし
て、イギリス側が提供し得ない地域の専門家であることがひ
とつ、ゾミアという概念に関心を示すことがもうひとつ、外
国史を専門としていたとしても日本や東アジアにも一定以上
の関心と知識を持つてることがさらなる条件であった。
オックスフォード側の提案で、一セッションは一人当た

り三〇分で換算し、六〇分もしくは九〇分。長く議論の時
間を取りたいために、報告時間は一〇分とされた（ただし
これを守った人は少なかった）。全部で五セッションが用
意された。報告者は全体としてアーリーキャリアの若手・
中堅が多数を占め、専門も歴史学のみならず文化人類学、
地理学、考古学、地域もヨーロッパだけではなくメソアメ
リカ、アフリカ、近東、中央アジア、東アジア、日本と多
岐にわたっていた。今回の目的は何か結論を出そうという
のではなく、事例を持ち寄って「中世のゾミア」というア
プローチの可能性を探ることにあつた。以下に全体のプロ
グラムを示しておこう。

二月八日

導入 キヤサリン・ホームズ、ナオミ・スタンデン、小澤実

第一セッション 司会：サイモン・ヤロー（バーミンガム）
アレズ・アザド（バーミンガム）

「ホラーサーン再考：イスラーム中央アジアにおけるゾ
ミア？」

ルイス・ブロック（ライデン）

「国家に抵抗するラジカルなアーカイブ：一時的自立地
帯としての歴史的ゾミア」

「グローバルな中世」から「中世のゾミア」へ（小澤）

小澤実（立教大学）

「後期ヴァイキング時代スカンディナヴィアにおける船を通じた共同体形成」

第二セッション 司会：ナオミ・スタンデン（バーミンガム）

川戸貴史（千葉経済大学）

「中世後期・近世初頭東アジアにおける海のゾミア民としての倭寇」

エリザベス・ランブーン（デ・モンフォート）

「インド洋世界へのアプローチとしてのゾミア」

ニック・マシュー（ロンドン歴史研究所）

「ゾミア、ヘゲモニー、カウンタパワー：アナキストな試行錯誤に向けて」

第三セッション 司会：パチャ・パノバン（オックス

フォード）

フィオナ・マッコネル（オックスフォード）

「地理学、ゾミア、地域研究に関する知識の生産」

ナヤニカ・マサル（オックスフォード）

「北インドの国家と統治を人類学化する」

要約1 イアン・フォレスト（オックスフォード）

二月九日

第四セッション 司会：小澤実（立教大学）

ランス・パーシー（バーミンガム）

「非正統性と折り合いをつけること…中期中国史における東北アジア境界域に関する歴史記述をめぐる議論」

鶴島博和（熊本大学）

「長い一世紀（九七三—一三三五）における二つもしくは三つの「イングラント」」

マレク・ヤンコヴィアク（オックスフォード）、クリスチャー・サーナー（オックスフォード）

「ビザンツと初期イスラーム帝国の辺縁で」

第五セッション 司会：キャサリン・ホームズ（オックス

フォード）

ステファニー・ワインジョーンズ（ヨーク）

「移動性、歴史、非国家的アクター」

諫早庸一（日本学術振興会）

「ゾミアにおける科学…イラン高原におけるニザール派運動（二〇九〇—一二五六）」

佐藤公美（甲南大学）

「中世末期イタリア半島における反乱と境界域」

要約 アマンダ・パワー(オックスフォード)¹⁰⁾

結論として、最初にイアン・フォレスト博士が提示した目的が達成されたかどうかでいうと、「中世のゾミア」というアイディアは可能性としては十分認められるといったところであろうか。報告時間一〇分で可能な限りディスカッションの時間をとろうという意図があったこともあり、ペーパーそのものはアイディアの域を出ないものも多かった(がワークシヨップなのでそういうものだろう)。

出席者やコメンテータの反応から私の感じた範囲での日本側メンバーの学的貢献を述べておきたい。一つは、海城や知識という視点を提示することができたこと。スコットのゾミア論に海城の射程が入っていなかったわけではないが、オックスフォード側の報告者はいずれも大陸世界の中のゾミアを前提としていた。ヴァイキングの船舶を扱った私と東アジアの倭寇を対象とした川戸氏は海城の持つゾミアの性格を強調したし、イラン高原における知的要素の継承を論じた諫早氏は今回のテーマに人間集団のみならず知識を参入させることが可能であることも示した。

もう一つは、同じフィールドを扱いながら異なる背景を持つヒストリオグラフィーを提示できたこと。鶴島氏の初期イングラント構造論と佐藤氏のイタリア高地論は、いう

までもなくいずれも現地ヨーロッパで研究蓄積の厚い分野である。しかし兩名は、現地のヒストリオグラフィーを消化しながらも、それぞれに日本史・東アジア史の研究も比較史的観点から積み重ねており、イギリス人やイタリア人とは異なる方向からの議論を展開することが可能であった。各国におけるヒストリオグラフィーの差異とその意義についてはとりわけスタンデン博士がコメントで強調していた。

三つ目に、東アジアと中央アジアの専門家の報告が可能であったこと。日本の史学科と異なりイギリスの大学の歴史学部は、原則、ブリテン史とせいぜいヨーロッパ史やアメリカ史のスタッフを抱えるのが原則である。とりわけアフリカやアジアといったそれ以外の地域は、史学科ではなく言語研究とセットになった地域研究学部ポストが分類されている(ビザンツ史研究も古典学部に所属)。オックスフォードの場合、イスラーム史、中国史、日本史などは東アジア学部であり、必ずしも歴史学部とジョイントをしているわけではない。「グローバルな中世を定義する」プロジェクトの時も中央アジア、東南アジア、日本などは欠如していた。今回、日本研究の川戸氏と中央アジア史の諫早氏の報告は、オックスフォード側が提供し得ないが、日本では厚い研究蓄積のある地域の研究を提供したという意

「グローバルな中世」から「中世のゾミア」へ（小澤）

味で大きな価値があった。

最後の点に関連してもう一点付け加えておくと、デイスカッションのために、英語と日本語の間での通訳を留意していたこと。欧米研究の中でアジア史の位置が必ずしも認知されない理由の一つに、アジア側の欧語での発信力の弱さがある。現実問題として、多数の地域の専門家が集まる場では英語が共通語となっており、その英語（をはじめとする研究言語）で報告しない限りは、各国での研究蓄積は当該国の中に留まることになる。この点は「グローバルな中世を定義する」での経験を踏まえてオックスフォード側が強い懸念を示していたこともあり、今回、メンバーの選出に先立って、専門的通訳の雇用費を会議費用から捻出することは早い段階で決まっていた。会議通訳は歴史学のチームを理解していることが前提であったため、英語日本語に堪能な歴史家に依頼した。神戸大学で博士号を取得しウエルカム医学史研究所で研究員を務めていたキム・ジョンラン博士である。結局、川戸氏も自身で質疑応答をこなしたためにキム博士が前面に出ることはなかったが、現実として、重厚な現地ヒストリオグラフィーを理解し史料を知悉しているアジア諸国の国史の専門家にグローバルな会議の場に着席してもらおう場合、通訳の存在はつどつど検討する案件になるかとは思（もちろん日本人報告者がへ

ルプをするという選択肢もあったが、運営上の可能性を模索する意味もあって正式に通訳を置くことになった）。

カンファレンスダイナーは徒歩圏内にあるレバノン料理店であった。総勢五〇人ほどが参加する大規模なものであり、ワークショップ中は直接会話することのできなかつた研究者らとも話すことができた。学術会議が学問的成果を出すことが目的というならば、こうしたダイナーもまたデイスカッションの場であり、むしろ緊張が解けている上に時間の余裕があるがゆえに、ワークショップ本番よりも生産的な議論ができることは指摘しておきたい。

四 今後について

二〇一八年度をもって科研費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）としてのOCG Hとの共同研究は制度上終了した。しかし二〇一九年四月から我々の共同研究は新しいフェーズに入った。筆者を代表として新規採択された科研費基盤研究A「前近代海域ヨーロッパ史の構築…河川・島嶼・海域ネットワークと政治権力の生成と展開」（二〇一九―二三年・課題番号19H00546）では、前年度までの科研の成果を受けて、さらなる展開を狙っている。一つは、国際発信力と実績のある中堅・若手研究者を中心

に組織されていること。一つは、ヨーロッパ半島の専門家のみならず、イスラーム、海域アジア、東アジアの専門家にも分担者として協力を仰いでいること。そして、オックスフォードグループのホームズ博士やスタンデン博士に加えて、ドイツ語圏のヨハネス・プライザー¹¹カペラー博士やゲオルク・シュトラック博士、フランス語圏のアルバン・ゴティエ博士やヴィヴィアン・プリジャン博士にも研究協力者や招聘研究者として参加してもらっていることである。世界の学術共同体は、人文学ですら、英語という共通語を得て表面的には一体化しつつあるように見えるが、¹² 実のところ、ヨーロッパ各国の持つ学的独自性とそれが構築してきた各国単位・言語単位のヒストリオグラフィの持つ重力は、甚だ大きいと言わざるを得ない。しかしながら、言語障壁もあつてある種の学問的海禁状態に置かれていた日本は、ある意味、フラットに海外諸国との研究協力を進めることができるようにも感じている。とりわけ中世的ゾミアの一部をなすことが前回のワークショップでも確認され、なおかつ欧米諸国でも研究途上にある海域を中心のテーマに据えることで、当該プロジェクトは独自の貢献を世界のアカデミアに還元する可能性を十分に持ち得ている。

以上の科研採択を受けて、オックスフォード側との研究

協力も次の段階を迎えている。中心的役割を果たしているイアン・フォレスト博士からは、次年度以降、新たな報告者による「中世のゾミア」に関するワークショップを、オックスフォードと日本で同時に開催し、報告をセレクトして論集として刊行できないかと打診を受けている。¹³ その際、可能であれば、英語と日本語を同時に世に問いたいとのこと。日本の出版事情を考えればややもの困難を感じるが、もし実現したとすれば、内容面だけでなく協力的体制としても画期的な試みとなるだろう。

「グローバルな中世」から「中世のソート」へ（小澤）

註

- (1) <https://globalhistory.web.ox.ac.uk/director-and-committees>
- (2) アンソニー・ポーター（中村武司・林剛志訳）『キリス帝国史研究の現在』『パブリックヒストリー』一・二〇〇四年、三四―四八頁。
- (3) 例えば『思想』一・二七号（二〇一八年）の特集「世界史をどうに語るか」グローバル時代の歴史像」を参照。
- (4) James Belich et al. eds., *The Prospect of Global History*, Oxford, Oxford UP, 2016.
- (5) Catherine Holmes and Naomi Standen, “Defining the Global Middle Ages”, *The Medieval Worlds*, 1, 2015, pp. 106-117.
- (6) http://globalmiddleages.history.ox.ac.uk/?page_id=8
: 1. To establish medieval history on a truly global footing: by integrating Africa and the Americas it seeks to ensure that the new field of global medieval history does not simply become another form of Eurasian history shaped by primarily Eurocentric debates borrowed from other periods 2. To analyse the global as it was experienced in the Middle Ages itself, paying close attention to material as well as written evidence, particularly material produced in non-elite contexts, in contrast an emphasis on high-end international trade. 3. To add much needed chronological and geographical specificity to the emerging field of global history 4. To create a vibrant

community of historians across the United Kingdom and beyond who are armed with the practical and intellectual tools to research and teach the fundamentals of a Middle Ages that was global and who can also contribute to the expanding field of global history.

- (7) Catherine Holmes and Naomi Standen (ed.), *The Global Middle Ages, Past and Present Supplement Series* 13, Oxford, Oxford UP, 2018(https://academic.oup.com/past/issue/238/suppl_13).
- (8) Benjamin Z. Kedar, and Merry Wiesner-Hanks (ed.), *Cambridge World History, Volume 5: Expanding Webs of Exchange and Conflict, 500CE–1500CE*, Cambridge, Cambridge UP, 2015; Chris Wickham, *The Medieval Europe*, New Haven, Yale UP, 2017.
- (9) スタニスラフ・ボリス・グリンバム博士が始めた中国を専門とする中世史担部教員である。
- (10) <https://www.trinity.ox.ac.uk/wordpress/wp-content/uploads/2018/11/Trinity-History-CUF-FPs.pdf>: the history of medieval Eurasia c.300-c.1300 CE, who have a specialism in one or more of the following areas: East Asia including China; Central Asia and the steppe; India; the Indian Ocean; and the Islamic World; but not the Western European and Byzantine worlds.
- (11) 科研費国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)「スカーライナヴァニアとその影響圏におけるストーン・石碑の総合研究」(課題番号 15KK0062)
- (12) James Scott, *The Art of Not Being Governed: An*

Anarchist History of Upland Southeast Asia, New Haven, Yale UP, 2010 (佐藤仁監訳『ソレン 脱国家の世界史』みすず書房、二〇一三)。

- (13) In 2009 James C. Scott used the term-of-art ‘Zomia’ to describe a transnational upland region of Southeast Asia where society, culture and politics were – until the mid-twentieth century – quite distinct from conditions in the core lowland territories of Cambodia, Laos, Vietnam, Burma, and China. Whereas the lowlands were easily incorporated into growing state structures, Scott argued, the populations of Zomia defied easy assimilation. Their agriculture utilised space in a temporary manner, they were not literate, they had distinctive languages and cultures; governments found it hard to reach them, count them, measure their produce, tax them, educate/reform them, impose institutions upon them, or to conquer them. In addition, in a dramatic and conscious break with traditional scholarship in History, Anthropology and Development Studies, Scott also claimed that the things making Zomia un-governable were not the relics of more ‘primitive’ or ‘natural’ societies, but historical products of state growth itself.

Scott’s work provides us with a new model for thinking about power, space, society and culture across the world in a comparative fashion. Our aim is to challenge existing models of global history, which have been based around states or ‘civilizations’ rather than the spaces in-

between, spaces which – in the Middle Ages – may have encompassed the majority of the inhabitable surface area of the globe. Thinking about zomias encourages us to question our assumptions about unit and scale in world history, and to find ways of writing in positive terms about societies usually deemed to lack something or have failed in some way: ‘non-literate’, ‘un-governed’, ‘backwards’ and so on.

- (14) プロトラムは以下参照。 <https://global.history.ox.ac.uk/event/conference-medieval-zomias-stateless-spaces-global-middle-ages>

- (15) 次のワークショップは、二〇二〇年七月三・四日にオックスフォードで開催することが決定した。その後、日本でもフオレスト博士他海外研究者を招待し、三回目のワークショップを予定している。

(本学文学部教授)